

坂戸工作所⑥

北野靖志の「元気が行く」

現場リポート・元氣印経営の秘密

油圧解体機メーカー、坂戸工作所のコンクリート製の門には「銭を追うな 仕事を追へ」との言葉が彫り込んである。創業者、坂戸正四郎が好んだ。苦労して建設機械の修理技術を習得した正四郎は「人に負けない技術を身につけさえすれば、仕事は自然についてくるものだ」が持論だった。

現社長の坂戸誠一は若きころ、その父にこっぴどく怒られたことをいまでも忘れない。「商売」の基本を教えられたからだ。中古クレーン販売をして

いた一九七五年（昭和五十年）夏のある日。顔見知りのブローカーが中古クレーンのペンキ塗り仕事を持ち

〈坂戸工作所〉

社長＝坂戸誠一氏
住所＝千葉市花見川区
☎043・259・0131
業種＝解体機械製造業
資本金＝5720万円
設立＝1945年4月
従業員数＝30人
年間売上高＝9億円
（2002年度見込み）

父の怒りに「商売」学ぶ

銭を追うな①

ねてきていった。「このでもなかったといつてく

間、ペンキ塗りを頼んだク

レーンが壊れた。ラジエー

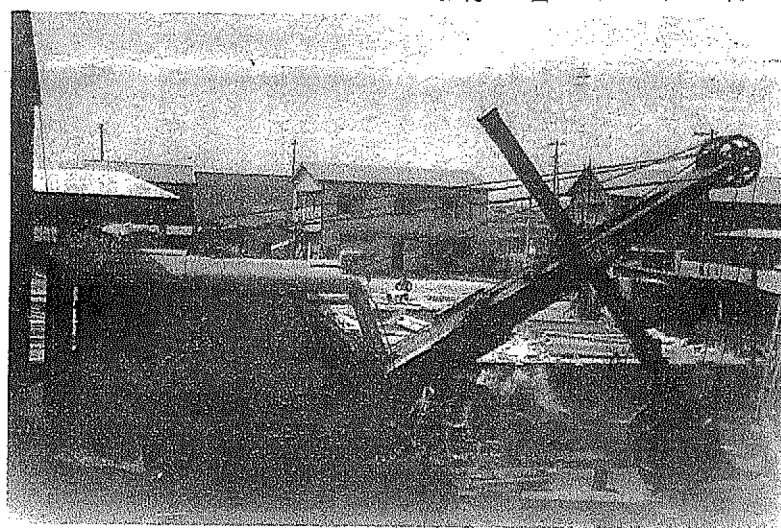
ターから水が漏れ、エンジ

ンが壊さつたのが原因だ

けど、客の解体業者が文句を言ってきた。頼むから坂戸で修理したときは何

えた。ブローカーが解体業者には「坂戸できつちりオーバーホールした機械だ」といって、結構な値段で売りつけていたことはわかってい

た。翌日、父の正四郎に報告したとたん、怒鳴られた。「ああいうブローカーと付きあっているようだが、な



1950年代の東京・東四つ木にあった頃の坂戸工作所。大型クレーンの修理を行っていた

ったし、エンジン代はそっくり持ちだしとなったが、父、正四郎は報告に文句を言わなかった。数日後、例のブローカーがまたまた訪ねてきた。「すぐ代わりのエンジンを乗付けてくれて感謝している。ところであの解体業者が坂戸工作所と直に取引したいといっている」

ブローカーは負い目があるせいか「解体業者と直に取引しても構わない」といった。報告を聞いた父が誠一にぼつりとひとことだけいった。「そうか」

誠一は初めて商売のコツを知った。「本当にいい仕事というのはこういうことか」。誠一は商売の基本を覚えただけでなく、これがきっかけで解体業者とのつきあいが始まったし、数年後、油圧解体機の商品化へとつながったからである。

〔文中敬称略〕
〔論説委員長〕